論文審査の結果の要旨

氏名　一木　絵理

本論文は、約 11700 年前以降に起きた急激な気候の温暖化を原因とする海水準変動による海域環境の変遷と人間活動とのかかわりを論じたものである。日本では、この海水準変動によってもたらされた海進を、縄文時代の貝塚の内容と分布の変遷から初めて論じられるようになったため、長らく縄文海進と呼ばれてきたが、その実態がどのようなものであったかを世界の研究に照らして検討したものでもある。

本論文は 6 章から成り立っている。そのうち第 2 章は、本研究の方法であるが、地質学を基盤とした沖積層研究を基礎としながら、共通の時間軸となる層序と編年を構築すること、環境変動の画期に注目して古地理変遷や海陸分布を明らかにし、とくに貝類遺体を用いて海域環境を復元すること、遺跡群との時間的・空間的な対応関係を明らかにするという複数の分野の手法を複合させており、本研究の特徴の一つを述べている。そして第 3 章では、問題の所在を明確にするために、気候変動と海水準変動、縄文海進研究史の二つの節にわたってこれまでの研究成果と問題点を摘出している。

第 4 章は、日本列島の 7 地域における縄文海進像を捉えなおす試みを行っている。7 地域とは、九十九里浜海岸に沿う古九十九里湾、その南部の古夷隅湾、関東平野中央部の奥東京湾、秋田県南部の古本荘湾、鳥取県の日本海に面する古青谷湾、青森県八戸地域の古八戸湾、北海道オホーツク沿岸の古常呂湾である。これらの地域設定は、それぞれ異なる規模の内湾であること、道路建設や遺跡の発掘調査など地下地質を知るための調査が盛んに行われていること、縄文時代以降の人間活動が活発であったことを根拠にしている。したがって、得られる情報の多くが新鮮であることが大きな特徴である。とくに、古本荘湾、古八戸湾、古青谷湾に関しては、遺跡分布が集中するうえ、重要な遺跡が分布するため古くから注目されてきたものの、調査・研究がほとんどなされてこなかった地域であり、初めての新しい知見を得ることに成功している。

第 5 章では、第 4 章で記載された各地域の縄文海進像の地域間比較が行われており、海域環境変遷の地域性とともに遺跡・集落変遷とのかかわりに見られる地域性が摘出されている。その結果、海域環境の変遷は地域によって違いがあることを認めており、その要因としては基盤となる地形・地質であり、沖積層層序や基底礫層、海進期の内湾形態、海退期（海水準安定期）の堆積システム、流入河川、埋積・侵食作用、構造運動などが重要な要素であることを明らかにしている。

第 6 章では、第 5 章までの各地域での事実記載と地域間比較を総合して、縄文海進の編年と画期を提案した上で、海域環境の変遷と人間活動のかかわりを論じている。すなわち画期は、約 7400ＢＰの一時的海退、約 7300～6100ＢＰの高海水準期、約 6100～5300ＢＰの海水準安定期、約 4400～3700ＢＰの海退期、約 2100ＢＰの一時的海退期の五つである。このような画期において人間活動様式が変化していく様相が明らかにされてい

るのである。以上の検討結果によって、縄文海進の地域性を明らかにし、新たな編年学的枠組みが構築されたこと、地域間の海域環境と人間活動との関係を捉えることができるようになった。

縄文海進研究はこれまで、ひとつの地域を研究対象に進められ、そこで構築されたモデルを他地域にあてはめて考察することが多かった。それに対して、環境の異なる複数の地域を捉えなおし、それぞれの比較を行うことで、実は縄文海進像に明らかな地域性があることを明らかにしたことは大きな成果であり、今後の研究の方向性を示唆するものとしても高く評価できるものである。

以上により、博士（環境学）の学位を授与できると認める。